

国際理解教育/開発教育 学習指導（活動）案

【実践者】

授業者氏名	山本 敬典	学校名	北九州市立霧丘中学校
教科（科目）・領域	社会科	対象学年（人数）	1年 1組（34名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2020年 11月 ～ 12月（4時間）		

【実施概要】

1. 単元名（活動名）：アフリカ州					
2. 実践する教科・領域：社会科 道徳内容項目C-18 国際理解・国際貢献 SDGs 4：質の高い教育をみんなに SDGs 10：人や国の不平等をなくそう 4 質の高い教育をみんなに 10 人や国の不平等をなくそう	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）： アフリカの自然環境・歴史・産業・人々の生活の様子を知り、「貧しい」「紛争が多い」「生活が苦しい」というイメージだけではない現地の人々の暮らしを理解し、違いや共通点を考え、そこから日本の課題を見つめ自らの生活を変えようとする。					
5. 単元の 評価規準	①知識及び技能	アフリカの自然環境・植民地支配の歴史・産業について知る。またアフリカの人々の生活の様子を知り、「貧しい」「紛争が多い」「生活が苦しい」というイメージだけではない現地の人々の暮らしを理解する。			
	②思考力、判断力、表現力等	現地の人々の生活の良いところや課題を見つけ、日本との違いや共通点について考えることができる。			
	③学びに向かう力	アフリカ（またそこに住む人々）のよいところを考えると、日本の課題を見つめ、自らの生活を変えようとする。			

6. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由あるいは単元の意義】 <u>(1) 単元の意義</u> ・本年度6月に「アフリカのイメージを教えてください」という質問を含むアンケートを本校1学年の生徒へ行なった。その中では「貧しい子どもがたくさんいる」「紛争が多い」「生活が苦しそう」といった回答が多かった。しかし、現地の人々は明るく、元気に、生活を送っている。そして彼らとともに生活すると、日本人には真似できない彼らのすごさも知ることができる。生徒がイメージするアフリカとは違う、現地の様子を伝えることで、遠くに住む人々のことをより身近に感じることができる。それがアフリカをより理解することにつながっていくと考えられる。 ・SDGsの視点から考えると、先進国である日本も様々な問題を抱えている。また、タンザニアの学校現場において、過酷な環境にあるからこそ自ら考え努力する生徒の姿がある。アフリカに住む人々の暮らしを知り、自らの生活を振り返る機会を作りたい。給食を残さず食べること、物を大切にすること等の大切さを改めて実感することができる。 <u>(2) 国際理解教育として本単元の意義</u> 本単元では、教師自身の青年海外協力隊としての経験・JICAのアフリカに関する教材を元に授業を構成する。特に本時においては、タンザニアの学校現場や生徒の生活を題材として授業を進める。自身の経験を授業にすることは汎用性に欠けるのではないかという意見もある。しかし、自身の経験を普遍的な教材へ変換することを目指して授業作りを行い、汎用性の高い教材を作りたいと考えている。児童・生徒が日本の豊かさや発展について、アフリカのある国の状況を踏まえて改めて考え直すこと。社会科に限らず、道徳の内容項目C-18「国際理解・国際貢献」でも活用できるような資料・発問・展開を目指している。 【児童／生徒観】 本学級には日本や世界の出来事に興味を持っている生徒が多く、これまでの歴史的分野の学習を通して、積極的に質問する姿が見られた。疑問や興味があることに対して、活発に発言する生徒が多く、明るい学級である。一方で、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、話し合い活動が制限されている。普段の授業は一斉講義のスタイルをとっており、意見交流することに慣れていないのではないかと考えられる。 国際理解教育を実施するにあたり、教師からの一方通行の授業で終わるのではなく、生徒のうちにあったような物を引き出したいと考えている。そのために生徒間の交流は不可欠であり、うまく意見を引き出したい。 【教材観】 本市のスタンダードカリキュラムでは、本単元の最後に「アフリカの国々が抱える問題点」について考え、自立に向けた解決策をまとめることが記述されている。もちろん、アフリカは様々な問題を抱えている。しかし、自立に向けた解決策をまとめることだけが全体のまとめでいいのだろうか。現地の人々の暮らしに目を向けると、彼らから学ぶものは
--	--

	非常に多い。またSDGsの観点から考えると、途上国だけが問題を抱えているわけではないことは明らかである。そこで本単元ではアフリカが抱える課題に目を向けた上で、アフリカの人々の生活の様子を知り、日本の生活を見つめ直す機会を作りたい。 【指導観】 コロナ禍に置いて、班活動が制限を受けている。多くの授業は一斉授業で行われ、社会科も例外ではない。しかし、教師が喋り、知識をもった生徒が答えるという形式では置いてけぼりにされる生徒も出てくる。本単元ではJICAの開発教育の教材や、自身の写真を使ったフォトランゲージを用い、全員参加型の授業を目指して指導していきたい。
--	--

7. 単元計画（全4時間）

※全体の総時間数や「本時」の記入場所は適宜変更してください。

時	ねらい	学習活動 左記のねらいを達成するために組み込む学習 活動のみを簡潔に書きます	資料など ※: JICA リソース 活用はここに記載
1	・アフリカの自然環境の大まかな様子を把握する。 単元を貫く問い アフリカの人々はどのような暮らしをしているのだろうか。	・自然環境について調べる ・考えを共有し、発表する ・ワークシートに記入する	ワークシート 地図帳 Mundi2015 年 4 月号「西アフリカの ある国の小学生の一日」
2	・アフリカの歩みと文化、旧宗主国との関係について考える。	・アフリカの歴史について調べる	ワークシート 地図帳
3	・アフリカの産業の特色と問題点を考える。 ・私たちの生活とアフリカとのつながりを考える。	・少人数班で「つながりを考えるワーク」に取り組む ・考えをワークシートに書く	ワークシート JICA「私たちの生活とアフリカとのつながりを考えるワーク」
4 本時	・アフリカのタンザニアの人々の日常生活を知り、自らの生活を見つめ直す。	・写真を見る ・フォトランゲージをする ・発表、共有する ・考えをワークシートに書く ・単元を貫く問い「アフリカの人々はどのような暮らしをしているのだろうか」についてまとめる。	ワークシート 自分が撮影した写真や動画

8. 本時の展開（概略） 本時のねらい：アフリカの人々の暮らしを理解し、良いところや課題を見つけ、日本での自らの生活を見つめ直す。 ※過程の網掛け部分は適宜変更下さい。			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (3分)	〈タンザニアの生徒が授業中にマンゴーを食べている写真を見せる〉 「生徒たちが食べているものは何だろうか」 ・何を食べているのだろうか。何かの果物かな。 ・自由な学校だなあ。 「答えはマンゴーです。マンゴーが採れる季節になると、休憩時間にマンゴーを食べる時があります。」 「今日はタンザニアで撮られた写真からアフリカの人々がどのような暮らしをしているのかをみんなで考えましょう」	生徒の興味関心を惹く。	パワーポイントを使い、写真を表示
展開 1 (20分)	〈フォトランゲージを行う。9つの班へそれぞれ2枚ずつ写真を配布。〉 「各班でフォトランゲージに取り組みましょう。」 「誰が何をしているのか。何を考えているのか。どういう写真なのか。付箋に書いて意見を共有しましょう。」 【以下、12枚の写真】（ ）は配る班の数 ・日本とタンザニアの違いを表す6枚 ① 自作のボールを見せる生徒（1） ② 生徒でいっぱい教室（2） ③ 家族みんなで食べるご飯（2） ④ 山の上からの壮大な景色（1） ⑤ 水を運ぶ生徒たち（1） ⑥ これからウサギを捌く生徒（2） ・日本とタンザニアの共通点を表す6枚 ⑦ 携帯電話（1） ⑧ 黒板の板書（1） ⑨ 制服を着て登校する生徒（2） ⑩ 予防接種を受ける生徒たち（1） ⑪ 卒業式で踊る生徒たち（2） ⑫ 受験勉強に励む生徒たち（2）	写真は計12枚。他の班と同じ写真が配られる班もある。違いを表す写真1枚、共通点を表す写真1枚。各自が付箋で意見を書き写真の余白部分に貼り、それぞれの考えを共有する。 フォトランゲージを行う際の注意点も確認する。 以下、①～⑥  	タンザニアの学校現場等で撮られた12枚の写真（以下参照） 〈付箋の色分け〉 違い→赤の付箋 共通点→青の付箋 以下、⑦～⑫  

〈まずは個人で写真について考えたことを付箋に書く時間をとる〉

〈班で共有する〉

- ・タンザニアの生徒たちも制服を着て登校しているんだ。みんな木を持っているから、持ち物のうちの一つかな。何に使うのだろう。
- ・山上にいて気持ちよさそう。アフリカは景色が素晴らしい。
- ・タンザニアでも携帯電話が使われているとは知らなかった。意外と日本と同じだ。
- ・この写真は生徒がみんなで踊っている。体育の行事だろうか。でも制服を着たままだから、何かのお祝い事かな。
- ・この動物はウサギかな。ウサギを捕まえているようだけど、食べるのかな。

〈代表者 9 人が発表を行う〉

「それでは代表の人は発表してください。」

- ・タンザニアの人々は大きな皿に入ったご飯を家族で仲良く食べています。1つの皿で食べるので、いつも家族で会話をしながらゆっくりとした時間を過ごしています。
- ・遊びに使うボールを見せてくれています。サッカーボールがあまりないので、自分たちでボールを作って遊んでいます。
- ・友だち同士が集まり、将来の夢に向かって勉強をしています。蚊帳があり、この部屋で寝泊まりしています。受験に向けて頑張るのは日本もタンザニアも一緒だと感じました。

〈各写真に教師が追加で説明を行い、タンザニアと日本の共通点や、課題、良いところなどを確認する。〉

展開 2

(15分)

「フォトランゲージではタンザニアの課題や良い点がたくさんわかりました。ではタンザニアの人々の暮らしが少し想像できたところで、個人の意見を聞きたいと思います。あなたはタンザニアで1年間暮らしてみたい？暮らしてみたくない？自分の気持ちを示して、理由も書きましょう」

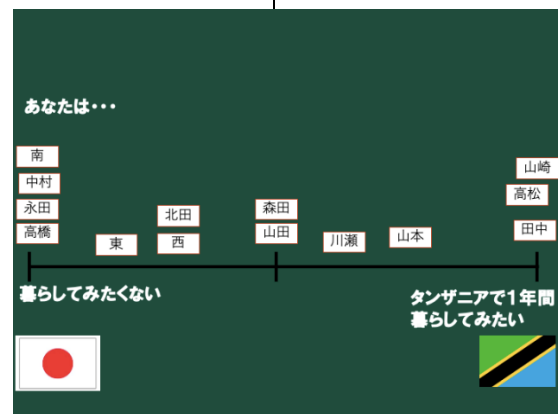
〈黒板にメーターを描き、ネームプレートを貼り、



発表者の話を聞く際にメモを取るよう促す。

	意思表示させる) 「理由を発表しよう」 ▼暮らしてみたくない人 ・やっぱり何でも整っている日本という環境が好きです。 ・タンザニアと比べると水道も使えるし、ご飯の種類もたくさんある。改めて日本が良いと思った。 ▼1年間暮らしてみたい人 ・タンザニアの暮らしは物が豊かでないからこそ、何でも自分で作ってしまいすごい。一度体験してみたい。 ・自然や景色が広くて悩みなんて忘れてしまいそうと思った。家族の仲がよく、会話も多い。 ▼真ん中付近に貼った人 ・アフリカといえば貧しいというイメージだったが、それだけではなかった。タンザニアという国のことをもっと知りたい。もっと知った上で決めたいと思う。 「途上国と言われるタンザニアにも、日本にはないような良い部分がたくさん見つかりましたね。」 「またアフリカの人々の暮らしを知ることで、改めて日本がの良さや課題も見えてきたと思います。」	イエスかノーだけではなく、中間でもいいし、そのまた間でもいい。自分がここだと思うところとその理由を考えるよう促す。	個人のネームプレート 黒板のメーター
まとめ (5分)	〈単元を貫く問いについて、個人でまとめる〉 「アフリカの人々はどのような暮らしをしているのだろうか？」 ・途上国と言われるタンザニアでは様々な問題もあるが、皆が明るく元気に暮らしている。日本のように発展することも大事だが、その中で失われるものもあるということがわかった。 ・タンザニアは物がたくさんあるわけではないが、「貧しい」わけではないことがわかった。日本はたくさんものを手に入れた。しかし、食べ物や物を大切にする気持ちを忘れてはいけないと思った。 ・タンザニアの人々は何でも自分たちで作ってしまったり、困難を乗り越える力がついていると思った。私たちも何かあれば自分の頭で考えて、行動できるようになりたい。	どのような暮らしをしているのかまとめる上で、自らの生活を振り返ることを促す。何か変化させることができることがあれば考えるということも伝える。	

黒板の数直線と生徒の意思表示のイメージ



9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法） タンザニアの人々の日常の生活を知り、課題や良い点を発見し、他の生徒の意見も踏まえ、自身の考えを深めることができている。日本での自分たちの生活を見つめ直し、変化させたいことなどを考えることができている。 （ワークシートでのまとめ、話し合い活動）
10. 学習方法および外部との連携 【学習方法】 ・フォトランゲージにより、生徒全員が交流し、意見が自由に言いやすい場面を設定する。 ・「あなたはタンザニアで 1 年間暮らしてみたい？暮らしてみたくない？自分の気持ちを示しましょう」という発問に対して、数直線を使い、自分の意見を表しやすいようにする。正解のない抽象的な問いを用いることで各自の「こだわり」や「価値観」を引き出し、共有する。
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み 1 年生 6 クラスで本実践を行う。

【自己評価】

12. 苦労した点	本時のねらい「アフリカの人々の暮らしを理解し、良いところや課題を見つけ、日本での自らの生活を見つめ直す」に対して、良いところや課題を見つけることは多くの生徒が達成できていた。フォトランゲージや班での意見の共有を通して日本との共通点や、違うところの意見交換が活発に行われた。中には「（日本より）物を大切にしたいので生活を体験したい」「アフリカの人々はなんでも自分であることができる。暮らしたら生きる力がつきそう」といった意見を発表した生徒がいたことは大きな成果である。しかし、このように自らの生活を見つめ直すというところまで考えを深め、それを全体に発言できた生徒は少なかった。もっと生徒の意見を引き出す「問い返し」を行うことや、資料を精選することは次への反省点である。
13. 改善点	本実践を 6 クラスで行なった。主発問である「あなたはタンザニアに 1 年間暮らしてみたい、暮らしてみたくない」においてどのクラスにおいても約 7 割の生徒は「暮らしてみたくない」の側を選んだ。黒板にネームプレートを貼る段階で、どうしても意見が集中する方に流されて、自分の意見を変えてネームプレートを貼る生徒もいたように感じた。より多様な意見を引き出すためには、できる限り意見が偏らない方が良いと考えられる。これに対する改善点として以下 2 点をあげる。 ①フォトランゲージに用いた写真の見直し フォトランゲージの写真で生徒が「タンザニアは大変だ」と感じるものがあったのではと考えられる。生徒がそう実感する写真が多ければ、「暮らしてみたくない」の方が増えてしまう。例えば「②生徒でいっぱい教室」「⑧黒板の写真」はどちらもタンザニアの教室を写したものである。②は生徒数が多く机や椅子を共有している生徒もいるということがわかる写真である。その中で⑧の写真では数学で使われている記号なども同じで、学習内容は日本と大差ないということを読み取ってほしいという意図があった。しかし⑧にも椅子に座れていない生徒がおり、どちらも「大変だなあ…」と実感するだけに終始し

	た生徒がいたように感じた。 ②他人の意見に流されないようにする学級経営や工夫 ネームプレートで自分の意思を示す手法は学級により学習効果が変わってくる。例えば多様性が認められており、自由に意見が言いやすい風土がある学級は各自が自分の意見を堂々と伝えることができる傾向にある。しかし、他人の意見を批判する雰囲気があり、普段から「多数派に合わせておいた方がいい」といった風土がある学級では状況も変わってくる。日常の学級経営の重要性を改めて感じた。また ICT 機器を用いて同じように自分の意見をタブレット上で表明し、全体共有するという方法もある。こういう手段も今後検討したい。												
14. 成果が出た点	・日常の授業ではクイズや少人数班での調べ学習を通して、答えを見つける学習が多くなっている。しかし今回の授業では各自の「こだわり」や「価値観」を引き出したかった。そこで授業の冒頭で「今日は答えがあるものについて学習をするのではなく、皆さん自身の考えを教えてください。答えはないので、間違いもありません」と全体に伝えた。生徒たちから活発な発言が見られたのは成果である。 ・生徒は初めてフォトランゲージを行なったが、写真にうつる人々がどんな感情をもっていたのかなど、細かい部分まで話し合うことができていた。 ・フォトランゲージ（班）→発表（全体）→主発問の問いかけ（個人）→ネームプレートで意思表示（全体）、という流れが非常に良く、活動がスムーズに進んだ。												
15. 学びの軌跡 （児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	【授業前のアフリカのイメージ】 本年度6月に授業アンケートを取った。その質問の一つに「アフリカのイメージを教えてください（自由記述）」を設定した。 <table border="1"> <caption>アフリカのイメージに関するアンケート結果</caption> <thead> <tr> <th>イメージ</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>「動物が多い」「自然」のことなど</td> <td>45%</td> </tr> <tr> <td>「暑い」など気候に関すること</td> <td>23%</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>15%</td> </tr> <tr> <td>ネガティブなイメージ</td> <td>12%</td> </tr> <tr> <td>ポジティブなイメージ</td> <td>5%</td> </tr> </tbody> </table> 図1 アフリカのイメージについて（生徒179人が回答） 生徒の多くはアフリカといえば「動物が多い」「自然が豊か」「暑い」というイメージをもっている。また5%（9人）はポジティブなイメージをもっており、「楽しそう」「やさしい」「厳しい環境でも頑張っている」と記述した生徒もいた。その中でネガティブなイメージをもっている生徒が12%（21人）いた。「貧しく、	イメージ	割合	「動物が多い」「自然」のことなど	45%	「暑い」など気候に関すること	23%	その他	15%	ネガティブなイメージ	12%	ポジティブなイメージ	5%
イメージ	割合												
「動物が多い」「自然」のことなど	45%												
「暑い」など気候に関すること	23%												
その他	15%												
ネガティブなイメージ	12%												
ポジティブなイメージ	5%												

「苦しそう」「治安が悪い」「紛争が多い」「技術が発展していなく、生活が苦しそう」「恵まれない子どもたちがたくさんいる」「学校にいけない子どもがいるイメージ」といったような記述が見られる。生徒は今までアフリカについて特別な学習は行っておらず、テレビやニュースなど一部の情報からアフリカのイメージをつくっている。

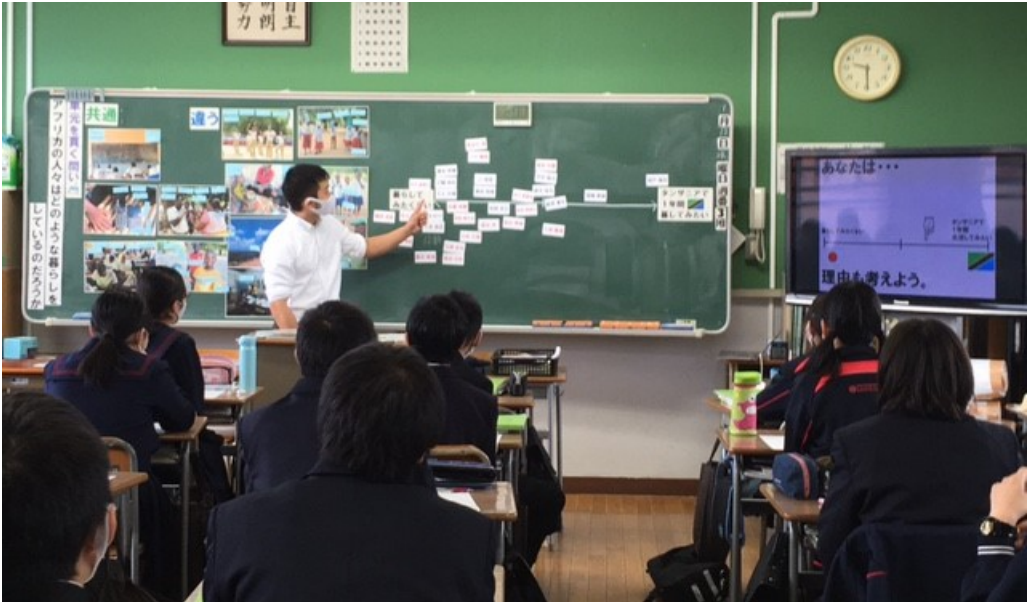
【本実践での変容が見られた生徒の発言】

ネームプレートで「タンザニアで1年間暮らしたいか、暮らしたくないか」の主発問に意思表示をしたのち、その理由を自由に発言し、それに対して問い返しを行った。その際、以下のような発言が見られた。

- ・アフリカの人々はなんでも自分ですることができる。暮らしたら生きる力がつきそう。自分もアフリカに行ってそういうところを見てみたい。
- ・物を大切にしていかなければいけないので、これはいい写真だと思う。ウサギにとっては悪い写真だ。
- ・生活で大変なことも多そうだけど、新しい文化を見てみたいし、体験してみたい。一度挑戦してみたいと思う。
- ・言葉が通じるなら暮らしてみたい。
- ・タンザニアでは家族との交流の時間が多くて、楽しく生活してそう。

【本実践のまとめに対する生徒の記述】

- ・決して裕福ではないかもしれないけど、現地の人は生活を楽しんでいるし、みんな助け合って暮らしているのが、アフリカのいいところだと思う。水道や暑さなど、私たちから見ると大変そうに思えることも、アフリカに暮らす人たちからすると、当たり前ですごいと思う。
- ・水を自分で運んだり、机なしで授業したりと大変な面もあるが、日本とは違って家族との交流がすごく多いし、1日1日がすごく楽しそうだった。
- ・人が多いので、みんな楽しそうだし、日本と比べると生活は厳しいけれど家族との団らんの時間も多し、アフリカの生活もいいなと思った。
- ・日本とは違う生活だけど、アフリカの人たちの生活をしてみたら、楽しそうだし、何でもできるようになれる気がする。
- ・日本と比べてけっこう不便だけど、タンザニアでは物のありがたみや人との団結力、生きる力などが感じられると思った。
- ・私たちが学んできたアフリカは紛争があったり、不便だったりして、あまりいいイメージはなかったけど、実際に住んでいる人は結構楽しそうだし、大変なことばかりではないと思う。これからも世界のいろいろな地域について積極的に知っていききたいと思う。
- ・日本と違った卒業式やご飯の食べ方だったりがあっという間だった。写真を見て、タンザニアの人は仲が良いと思った。アフリカの人は健康的な生活をしてい

	て悪いイメージが良いイメージに変わった。 ・私たちと同じ年齢でも私たちより大変なことをしているのに、今日みた写真の人たちはみんな笑顔で写っていたのすごいなと思いました。日本では経験のできないような事がたくさんあると思うから、少しの間だけでもタンザニアで暮らしてみたいです。 ・アフリカの人々は日本と比べて、いろいろ大変そうだけど、水くみや勉強、スポーツや卒業式など、どれも楽しそうにやっていてすごいなと思った。自然環境が良さそうだし、大きな建物が建っていないので、景色がすごく綺麗なのいいなと思いました。日本と違う経験ができて学べる事ができると思った。 【それぞれが意見を表明した黒板】 
16. 授業者による自由記述	アフリカの写真を見せながら一方的に解説する授業はとても簡単だ。だが本実践のようにフォトランゲージを通して、遠い国の人々のことを想像し、自分だったらと考えることはとても意義があったと考える。前者の方が伝えられる情報量が多い。しかし想像力を膨らませ、アフリカの自分を自分のこととして捉えることで、より世界への興味が増した生徒もいたのではないかと考える。本実践の授業の流れである、フォトランゲージ（班）→発表（全体）→主発問の問いかけ（個人）→ネームプレートで意思表示（全体）は他の分野でも応用できると考えられる。これからは教材研究に勤しみ、世界の出来事を自分のことと捉え、世界に目を向けられる人材を育成できるような国際理解教育の授業をつくりたい。

参考資料：

北九州市教育委員会「北九州スタンダードカリキュラム 中学校 社会科」平成 28 年